



Run&ishin



表紙作品

- 作 者：やまざきかずお山崎和夫（第2この街学園）
- タイトル：富士山
- 画 材：鉛筆・マジック
- サ イ ズ：たて42cm×よこ57cm



よこがお

表紙画作者紹介

山崎和夫さん

以前登った思い出のある富士山は、和夫さんにとって特別な山。散歩の時間では湖越しにグループホームのそばから眺める事も。富士山の中の溶岩や地層と富士山を彩る“なないろ”の虹と一緒に描かれています。

日本でグループホーム制度が産声をあげて35年。その目的もニーズも様変わりしています。そこで、これからのグループホームに求められるものと題して、小松敏幸地域支援部会長（小諸学舎長）にお話をお伺いしました。

グループホームの現状についてお聞かせください。



長野県では、昭和61年に現在のグループホーム事業の前身となる長野県心身障害者生活寮設置運営事業補助金交付要綱（県単生活寮）が、障がいのある方々の生活の場を確保するために定められました。長野県のグループホームを全国的に見ると、知的に障がいのある方の利用が平均より低い一方、65歳以上の方の利用が多い傾向にあります。令和5年4月1日現在の長野県集計では、事業所数228カ所、その内訳は、介護サービス包括型事業所数211事業所（定員3,461人）、日中サービス支援型事業所数15事業所（定員208人）、外部サービス利用型事業所数2事業所（定員23人）となっています。

小諸学舎の日中サービス支援型グループホームの設立とその思いについて伺います。



小諸学舎では、昭和62年に県単生活寮として障がいのある方々の少人数の生活の場を小諸の地に開設しました。当初は、隣近所の方々との交流や職場との連絡調整、余暇活動の充実等に重点が置かれていました。それから30年以上経過し、利用されている方々も年を重ね、通院回数も増し、日中活動の場も福祉的事業所を利用するようになりました。これからも住み慣れた場所で、気心の知れた仲間と暮らし続けるためにいくつかの課題がありました。その一つは建物設備で、具体的には車いす対応のスペース、手すり設置、介護用に考慮されたトイレ・風呂の設置などで、更に、支援（介護）しやすい職員の動線の確保も大切だと考えました。もう一つは、ターミナルケアも見据えた24時間365日の支援体制確保にあります。そのような課題に直面し改善計画をしている折に、長野県より障がいのある方々の重度化・高齢化に対応するために、平成30年度から日中サービス支援型のグループホームが創設されるという情報を頂きました。そして、県下第1号となる「みゆき生活舎」（定員9名、短期入所1名）が地元の方々のご支援・ご協力により令和元年に開設されました。人は誰しも日々の生活を送り、病気になり、老いてやがては天に旅立ちます。この営みを支える関係者は、安心かつ安全で穏やかな生活が続けられるよう心を配り、障がいがあってもなくても市民として共に支え合いながら豊かな文化を築いていけることを願っています。



～日中サービス支援型グループホームの実践から～

小諸学舎の日中サービス支援型グループホームと地域のつながりに ついて伺います。



地域の皆さんとの交流スペースとなることを願い、グループホームと同じ建物に併設し、地域交流カフェ「こひつじ」を開設しました。昼食のランチは、毎週木・金曜日11時30分～14時まで営業しています。（詳細はフェイスブックをご覧ください。）

同時に、特別支援学校の生徒さんが作ったお皿や福祉的就労事業所のパン、クッキー、ボランティアの皆さんの協力により仕上がったカゴなども販売しています。

地域の皆さんを始め、福祉施設の利用者さん、児童施設のお子さんにもお越しいただき連日にぎわっています。店内にはお客さまの声を聞かせるためにメッセージノートを置いてありますが、「和ごはんランチを美味しくいただきました。今日やっと寄ることが出来て良かったです。御幸町によろこそです。」と地元の方からのコメントを頂き、とても嬉しい思いをしました。グループホームの利用者さんが笑顔いっぱいスタッフとして頑張っています。



地域交流カフェ「こひつじ」：(住所)小諸市御幸町 1-5-24 (TEL)0267-31-6210



解説

日中サービス支援型グループホームとは・・・

共同生活援助事業（通称：グループホーム）の一類型である日中サービス支援型は、障がいのある方々の重度化・高齢化に対応するため平成30年度に創設された。短期入所を併設し、地域で生活する障がいのある方の緊急一時的な宿泊の場を提供することとされ、地域生活の継続等、地域生活支援の中核的な役割を担うことが期待される。（1ユニット10名まで、2ユニット20名まで可能。）

質の確保を図る観点から、地方公共団体が設置する協議会等に対して年1回以上、事業の実施状況等を報告し、評価を受ける。



今後の課題について伺います。

グループホームは施設等からの地域移行の促進という流れに相まって「地域生活」の場とされ、そこで暮らすことが最終目標のように捉えられてきました。長野県における支援実践も30年以上経過し、新たな課題に直面するようになりました。それは、そこで暮らす皆さんの重度・高齢化、ターミナルケア、実際に支援するスタッフの人材確保にあります。また、これから利用しようとする方々、とりわけ発達障がい、強度行動障がいという状態のみられる方の受け入れには、質の高い支援の確保が必要です。更に、令和6年度からは一人暮らしを希望される方の支援も検討していくこととなるでしょう。

日々の実践を幅広く検証し、実り豊かな暮らしを支えるために、様々な専門性のある方々との関わりを深めていくなど、よりダイナミックな取り組みが求められているように思います。



わたしのチャレンジ

いろいろなことに
チャレンジしている
利用者さんをご紹介します!

寮での生活をはじめ、身の回りのことを自分たちで取り組むことになった
ゆうとさん。高等部卒業後の夢に向かってチャレンジしています。

チャレンジ!



自分のことは自分でします。

洗濯は、自分でできるようになりました。わからないことや難しい
ことは、まず聞いて教えてもらうことから始めました。今では、洗
濯をする一通りのことは自分でできます。

寮の後輩ができれば、
教えてあげます。



チャレンジ!



気になることは、ひとつずつ解決します。

気になることや話したいことがいっぱい、ついつい早口になってしまいます。

そこで、「気になること・話したいことノート」を作りました。話すよりもノートに書く方が、落ち着いて考えをまとめられます。

担当の職員さんとノートを見ながらお話しをして、気になることはひとつずつ解決していきます。

ノートがあれば、いろいろな人に相談できるし、話
もできます。





チャレンジ!



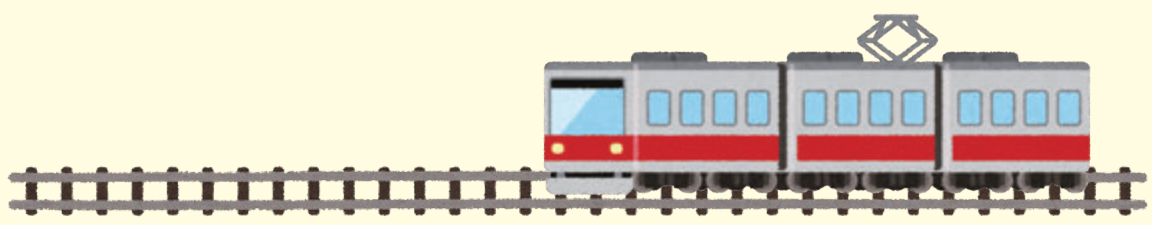
3 困った時は周りに助けを求めます。

大好きな電車に一人で乗って、困った時にどうするかを体験しました。
 駅に着くまでに困ったら交番、駅に着いて困ったら駅員さん。困ったら、
 誰かに助けをを求めることを心がけます。
 一人で、大好きな電車には乗れました。次は友達と大阪に行って、ユ
 ニバーサル・スタジオ・ジャパンで遊びたいと夢は膨らみます。

いろんなところで出かけたり、
 買い物やお城にも行きたい!



卒業したら、大好きな電車が走る故郷に帰って生活したいという夢を抱い
 ているゆうとさん。
 わからないことは教えてもらい、ひとつひとつできるようになりました。
 落ち着いて話をしようとする意識が芽生え始めました。困ったら誰かに相談
 できることで、行動範囲が広がりました。
 ゆうとさんの夢に向かうチャレンジは、これからも続きます。

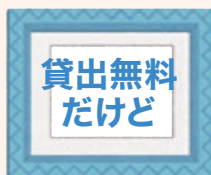


コロナ禍だからこそ生まれた“アートでつながる人との出会い”

「作品の貸し出し」サービスをはじめ、利用者さんの個性あふれる作品とお店、またお店に来る方とをアートでつないでいる取り組みを紹介します。



コロナ禍で外にも出られないと悩んでいる際に思いついたのが、この「作品の貸し出し」です。皆さんに見ていただきたい作品をホームページで紹介して、その作品を飾りたいと思った方の元に届ける。そして、まったくアートに興味のない方も、作品が飾られたお店でその作品を目にする。そしてアートの輪が広がる。そんなつながりを考えました。



一つの作品を貸し出すのは、1カ月です。貸し出し料金は、無料。その代わりに作品を観た方の感想をいただくようになっています。作者が、お店に訪ねることもあります。



現在、飲食店・ホテルをはじめとする7店舗に貸し出しをしています。10以上の作品が貸し出され、多くの皆さんの目に触れています。



ひとつの取り組みですが、多くのヒントが隠されていると思います。各事業所でアート担当している皆さまの活動のヒントにつながってほしいと思います。



取材協力：軽井沢町 浅間学園 様 / 小諸市 りんご屋 skegawa 様



長野県知的障がい福祉協会会長 宮下 智（明星学園）

【心とは裏腹な身体 その③】

「いっしょにいたい」のに「かえれ～」と叫んでしまい、「好き」なのに「きらい」と言ってしまうKさんの支援は、パフェ作りをするというKさん+同年代の女性職員2名の女子会の開催からスタートしました。彼女はすでに30才、入所してから10数年の月日が流れていますが、おそらく「好き」を支援職員に向けて伝えたのは初めてのことだと思われる。

「好き」を伝えることは、重度の知的障がいの方、またそれに加えて強度の行動障がいを呈する方にとって、それはそれは困難をとまなう大仕事になると思われる。

毎日、毎日、多くの方々のお世話になり、ひとたび行動障がいを呈すれば、多大な迷惑と負担をかけていると主観的に感じているKさんにとって、「好き」を伝えることのリスクは相当に大きいものがあります。

なぜならKさんの心の中は、「どうせ嫌われている」という気持ちで渦巻いていますから、「好き」という勇気を出して伝えたポジティブなメッセージの見返りが心を大きく傷つけるネガティブなメッセージ、「嫌い」であるとするなら、人というものは、「好き」を伝えるよりも、どうせ嫌われているなら「嫌い」を伝えることを選択する生き物だからです。

豊かな人生を歩むための心的なエネルギーは、ポジティブなアプローチにポジティブな応答が返る時に得ることができます。例えば、初デートに思い切って誘ったときに、即座に快諾の返答が返ってくるというように。

ネガティブな応答が返る率が高いとき、人は自分の心が傷つかないために、まず、ネガティブなアプローチをするものです。そのネガティブなアプローチにはネガティブな返答があるに決まっていますから、「ああ、やっぱり私は嫌われているんだ」と変な安心感を得ることができて、心は傷つかないわけです。また、悲しいかな、ネガティブな行動は、簡単に関心や注目だけは得ることができますから、一回その快感を味わってしまうとなかなか止めることができなくなります。「好きだと伝えたいのにつねってしまう」→「やめてよと怒られる」→「ヘラヘラ笑っている」→「悪いことしてってるってわかっているの？」とさらに怒られる」というようなネガティブな連鎖が生じます。でも

関心を集めている快感がありますから、ヘラヘラ笑ってしまうに違いありません。

この困難性の中で、支援の専門性はネガティブなアプローチに対してポジティブな応答を返すという、ウルトラ変則技になります。

「好き」という感情は、人生に豊かさを与えます。それは、「好き」はつながりを生む言葉、行動だからです。パフェ作りの女子会の後、Kさんの「かえれ～」と「夜勤者は〇〇さんです」は、すっかり無くなりました。彼女は女子会で、人生で初めて家族以外の対人関係の中で、つながりを感じることができたのでしょ。

しかし、＜心と裏腹な身体＞は簡単なことでは治りません。

今度は、KさんはメンバーCさんの名前を何回も大きな声で何回も叫んだり、座っている椅子を蹴ったりということを始めました。Cさんも「Kさんきらい～」と大パニックです。まさにネガティブにネガティブが返る修羅場です。しかし、ここでも支援は、CさんにKさんといっしょに大好きなプリンを食べようという提案でした。

今やKさんの人生のテーマは「好きを伝える、広げる」ことにありました。きっとKさんは、支援職員との女子会で得たつながりの感動を次はCさんに向けたのです。Cさんはちょうど亡くなった父親の年令に近い男性で、「好き」を伝えるのには絶好のターゲットです。つまり女子会で「好き」を伝えることに自信を得たKさんは、その得たポジティブなエネルギーを今度はCさんに向けたというわけです。

重度の知的障がいの方にとって、〇〇ができるようになるといった年令軸に沿ったいわゆる常識的な発達概念である＜縦＞の発達の道を歩むことは困難が伴います。彼らが幸せになるために歩むべき道は、それに反して＜横＞の発達を目指すべきです。そして＜横＞の発達とは、人間関係の豊かさ、それはたくさんのつながりの中で生きる道ということになります。他ならぬその道は「好き」を伝えることにあります。

このように、行動障がいのある方が「心と裏腹な身体」を抱えて「好き」を伝えるためには、心と身体が必ずしも一体的ではないことを熟知している専門的な支援者の存在が必須になるのです。

障がいのある・ないに関わらず、私たちのコミュニケーションツールの一つに言語的コミュニケーションがあります。しかし、相手に言葉だけではうまく伝わらないことってありませんか？ 伝わらない場合、態度や表情、色々な行動で伝えようとしてします。福祉現場で働く私たちの日常で、発信された言葉の本当の意味を知った時に感動することってありませんか？ その感動の一コマをお伝えします。

通所に通われているHさん。Hさんは、毎日紙に絵や大きな文字を書いて余暇を過ごされます。お得意の文字を書くときは、独り言をつぶやきます。支援員はつつい笑顔になってしまいます。

「人面犬は飛行機に乗らない・・・」の独り言。面白い・・・
つつい耳が傾いてしまいます。

今日は「お父さんは、緑に変わってしまったのです。」・・・面白い・・・

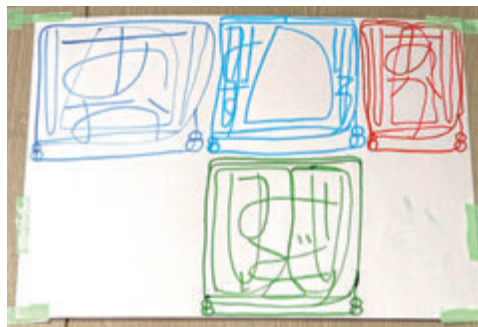
どうしてもその真相が知りたくて、ご家族にキーワードについてお聞きしてみました。

お聞きした中で、「緑」はHさんが大好きなアニメに出てくる「カメレオン総理」の色ではないかと推察しました。そしてお父さんは、毎朝Hさんを駅まで送ってくださる優しいお父さん。

もしかして、Hさんの大好きなお父さんと大好きなキャラクターのカメレオン総理が重なって笑顔の独り言になったのでしょうか。

Hさんの独り言に、つつい笑顔になってしまう毎日です。

Hさんの描く文字は、部屋いっぱいに貼ってあります。



長野県知的障がい福祉協会からのお知らせ

令和5年度
社会福祉功労者に対する
厚生労働大臣表彰受賞者

社会福祉法人 廣望会
綿貫 好子 さん

社会福祉の推進に貢献したとして、社会福祉功労者厚生労働大臣表彰を受賞され、11月15日に令和5年度全国社会福祉大会にて授与式が執り行われましたことをご報告いたします。

長野県社会福祉施設利用者互助会からのお知らせ

「令和6年度 付添介護保険」
更新のお手続きについて

令和6年度付添介護保険継続契約のお手続きについて、2月上旬にお知らせが届きます。

お手元に届きましたら内容をご確認いただき、手続きをお願いいたします。

お問
合せ

長野県社会福祉施設利用者互助会

☎026-223-2682



発行者 長野県知的障がい福祉協会 広報委員会

〒380-0936 長野市大字中御所字岡田98-1

Tel:026-225-0704 Fax:026-225-0714

URL:http://id-nagano.or.jp/

長野保健福祉事務所庁舎内

E-mail:na-chifuku@deluxe.ocn.ne.jp

発行日 令和5年12月20日 印刷所 たけい印刷

広報誌「RUN&らんらん」は長野県知的障がい福祉協会のホームページからも閲覧できます。

